
【乙女の事情】

—さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【乙女の事情】

【Nコード】

N6046G

【作者名】

ーさん

【あらすじ】

完全無欠の生徒会長桂ヒナギクにも悩みごとはある。そう、それは…【ヒナギクさん家の悩みごと】の続きにあたりますが、別にこれだけでも大丈夫です。

「ハア〜」

晴天が広がる青い空とは対照的に、その下にいる桃色の髪的女性はトボトボと、何処か落ち込んだ様子で歩いていた。

「ハア〜」

連続。

「ハア〜」

更にもう一回。

自分に足りない物を触り、その余りの虚しさに涙が出てきそうだった。

「判ってるわよ。私に胸が無いことは。だから、私なりに努力してきたのに。なのに…」

悔しさで胸が締め付けられ、虚無感が内に広がる。それと共に胸が膨らんでくれたら、こころ悩まずにいられるんだろうけど、そんなことが出来るはずないのは、自然の理というものだ。

「あんなこと、言わないでもいいじゃない。」

先ほど母に言われた言葉を思い出す。

「女の子の胸じゃない。」
ふに、ふに。

そんな疑音が聞こえるかも怪しい、この膨らみを恨めしげ見つめた。

確かに小さい。自分でも自覚している。だけど、あれはあんまりではないか。じゃあ何か私は女ではないと、胸が無い女の子は女の子ではないと。

「私にもつと胸があれば…」

(ハヤテ君だって振り向いてくれるのに。)

必ずしもそうではないのだけど、ヒナギクはそう思っている。

ヒナギクが自分のコンプレックスに悩み出したのは、今から数日前のことだった。

それは本屋に行った時のことだった。

なんとなく目についた女性雑誌を手に取ると気になることが書いてあった。

【女性は必見。気になる男の落とし方】

なんとも胡散臭い見出しだ。こんなものは信用出来るものか、そう思いながらも読んでしまうのはヤッパリ年頃の乙女なわけで。

ヒナギクは周りに誰もいないことを確認すると、雑誌で顔を隠す

よづにして中の文章を読んだ。

【攻略のポイントは一つ
自分の女としての身体を活かせ。】

「
…」

【上手く使って相手を意識させる方法】

「
…」

【自分の〇〇をさりげなく相手の腕にあてて e t c】

「
…」

【かくかくしかじか】

「
…」

パタン！

持っていた雑誌を閉じると、自動的に自身の目が自分のある一部
分に向かった。

…

沈黙が流れる。

数秒して考えがまとまった。結論 自分には無理だ。

もし女性の魅力が胸だけで決まるなら自分は全くの皆無だろう。

だって見た目は、いや見た目通りか、あるように感じられない。

理不尽だ。

ヒナギクは思った。

何故自分は人並以上に小さいのだろうか。神様も何もここまでしなくてもいいではないか。不公平だ、本当に。

いや、あつたらあつたでそれもまた不公平何だが…完璧過ぎて。

「ハア〜」

溜め息が溢れる。

いや、考え方を変えよう。自分がどんな体型でも用はハヤテ次第ではないか。

男性は大抵大きいのが好きというがハヤテもそうとは限らない。第一、彼のお嬢様も自分と同じくらいの大きさだ。それに、どこぞの偉人は言ったではないか【貧乳はステータスだ】と。

うん。そうだそうだ。別にこれはコンプレックスではない。ハヤテが小さいのが好きなら何も問題無しだ。

そう自分に言い聞かせ一人納得したヒナギクの中では、ハヤテはすっかり貧乳好きと決定しまっていた。

だから、後の光景を間の辺りにして驚愕してしまうことになる。

本屋に出ると見知った顔を見つけた。
あれは、

「ハヤテ君？」

ズバリ噂をすればだ。

今日はついてる。

途端に笑顔になるヒナギクは上機嫌な足どりで、ハヤテに声を掛けようとしたのもつかの間、その横にいる人物が目に入った。

「あれは……」

知らない人だ。

「誰だろう？」

白皇学院とも歩の高校とも違う学校の制服を着ている。
灰色のおかつぱ頭に、活発そうな印象を受けるその少女は美少女の部類に入るだろう。

ヒナギクは反射的に後をつけた。

声を聴くことが出来ないが、二人とも楽しそうに話している。

少女を見る。

会話の中で時々ハヤテに向けるその顔は笑顔で、ヒナギクは可愛いと思った。

気になる。

一体彼女は何なのか。もしかして、ハヤテの彼女なのだろうか。あり得ないことではない。白皇で誰かと付き合ったりしないのは違う学校に彼女がいるからという可能性も否定出来ない。

現に今、ハヤテは女の子と楽しそうに話しているではないか。

だが、前にハヤテは言っていた。自分には甲斐性が無いから女の子と付き合う資格がないと。では彼女は仲の良い女友達か。

そんなことを考えていると、衝撃の光景を目撃してしまった。

な、なんとあの女の子がハヤテの腕をその胸で包むように抱きついたので。

突然の行動にハヤテは動揺して、少女に何か言っていたが、その横の少女は離そうとはせず、イタズラが成功した子供のような顔を向けた。

それは正しく、さっき読んでいた雑誌に書いてあった、【気になる男の落とし方】の一つだった。

ふとっ、少女のその制服に隠れてもなお存在を強調するある一部を見る。

目の前が白くなった。

ああ、自分は負けたんだと思った。

勝手に人の好みを判断するのは良くない。ハヤテだって男の子だ。雑誌に書いてあった通り、ハヤテも小粒なイチゴよりも丸くて大き

いメロンのほうがいいに決まっている。

ポリユームのあるメロンのほうが食べ堪えがあるし（イチゴだったら何粒も食べなければいけない）、メロンソーダのほうがストベリーよりも人気がある。

それから、ヒナギクはその場に呆然と立ちすくめた。後をつけることも忘れ、道行く人に奇妙な目で見られようともし気にしない。

「…えっと、ヒナさんどうしたんですか？」

尋ねた人物は西沢歩。ヒナギクの思いも寄らない姿に若干引き気味である。

ヒナギクは振り返り虚ろな目を一度歩に向けると、遠い目をして言った。

「歩…私やるわ」

何のことやら。

ヒビ割れた壺から魂が抜き出たようなその眩きに、歩は疑問を浮かべるしかなかった。

更に引いたのは言うまでもない。

それが桂家の牛乳の消費量が上がったよ事件の真相だった。

そして、それはこれかも続くことになるだろう。

やってやる。やってやる。

いつか絶対にビックになってやる。

更なる決意を胸に抱き、ヒナギクは歩き出した。今度はちゃんと前を向いて、地球という大地を踏みしめる。

これは挑戦だ。

ナイチチと呼ばれる人類の大いなる一歩のためにヒナギクはもうその足を止めない。

負けない。私は負けない。

ヒナギクは走り出した。

目的は決まっている。

我が家にある聖水を求め、誰よりも速く進み続ける。

歩みをやめない限り、その切実な願いはきっと叶うものだと思いたい。

頑張れヒナギク、君の未来に栄光あれ。

ここで僕（作者）はユツキュンの言葉を思い出す。

e
n
d

「
無駄な努力
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6046g/>

【乙女の事情】

2010年10月8日23時43分発行